

氏名（本籍）	嶋田 和成 （ 福岡県 ）		
学位の種類	博士（言語学）		
学位記番号	博 甲 第 7094 号		
学位授与年月日	平成26年 7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	<b>Japanese EFL Learners' Acquisition of Discourse Markers:  A Comparative Analysis of Spoken Corpora and English Textbooks</b> （日本人英語学習者の談話標識の習得：話し言葉コーパスと英語教科書の多重比較分析を通して）		
主査	筑波大学教授	久保田 章	
副査	筑波大学教授	磐崎 弘貞	
副査	筑波大学教授	EdD(教育学)	平井 明代
副査	東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 教授	PhD(言語学)	投野 由紀夫

### 論文の要旨

本研究の目的は、英語教材論とコーパス言語学の研究成果を背景として、主に(1)日本人学習者による英語の話し言葉における談話標識(Discourse Marker)の使用の実態とその習得の特徴を明らかにすること、(2)日本のような「外国語としての英語」の学習環境において、談話標識のインプットとアウトプットの関係がどのようになっているか検証すること、の2点である。本論文は、言語コーパスに基づく多重比較分析の枠組みを用いた5つの関連する研究で構成されており、各研究には2から3個のリサーチクエスチョンが設定されている。すべての研究において分析対象となる談話標識はFun and Carter (2007) に基づく57項目である。

研究1と2では、日本人英語学習者の談話標識使用の特徴を明らかにすることが企図されている。研究1では、日本人英語学習者のコーパスとしてThe NICT JLE Corpus, 英語母語話者の子供のコーパスとしてCHILDES, 大人のコーパスとしてBNC (British National Corpus) の話し言葉コーパスの3つを分析の対象とし、(1)日本人英語学習者の熟達度と談話標識の使用の関係についての調査と、(2)日本人学習者と英語母語話者(大人と子供)の各々の話し言葉コーパスにおける談話標識使用の実態の比較が行われた。その結果、日本人学習者の場合、熟達度が上がるにつれて談話標識の種類が多様になり、一部の項目を除いて使用頻度も高くなる傾向にあることがわかった。さらには、全体的に日本人学習者は英語母語話者より談話標識の使用頻度は低い、一部の標識については、日本人学習者の相対頻度が高いという使用分布上の特徴が確認された。

研究2では、「国際話し言葉コーパス(LINDSEI)」のデータを用いて研究1の結果を再検証した上で、日本人英語学習者とフランス、ドイツ、中国など、他の非英語母語話者のコーパス・データとの比較を行った。その結果、まず研究1と同様に、日本人学習者と英語母語話者の談話標識の使用傾向の違いが確認された。次に、母語に関わらず言語の習得度が高くなると質・量ともにより多くの談話標識が使用されるが、日本人英語学習者は英語母語話者や他の非英語母語話者に比べて、特定の談話標識を過剰に、または過少に使用していること、soなどは、フィラーとしての使用法が顕著であることなど、日本人学習者の談話標識使用の特徴がさ

らに明らかとなった。

研究3と4の課題は、研究1と2で示された日本人学習者の談話標識の習得状況に影響を与えている要因は何かを検証することである。研究3では、その要因として学習者の母語である日本語を取り上げ、2つの調査が行われた。ひとつは、The NICT JLE Corpusにおける学習者の英語による発話データとその日本語の対訳データの対照分析であり、もうひとつは、日英両言語を用いたイラスト描写タスクにおける日本人英語学習者の発話データの分析である。英語と日本語の談話標識は一対一で対応するものではないため、ある日本語の談話標識の使用が特定の英語の談話標識の使用に直接影響を与えていると結論することは難しいが、特定の日本語の談話標識を多く使用する傾向が、英語の *and, so, but, then* などの使用頻度に影響を与えている可能性が示唆された。また *so* の過剰使用については、分布状況から日本語のフィラーの使用の影響を指摘している。

研究4では、別の要因として英語の検定教科書の影響について検討している。まず中学校の教科書15冊、高等学校の教科書の英語IとII各5冊、計10冊をデータベース化し、教科書中の談話標識の頻度と分布状況の分析を行い、次に学習者の談話標識のアウトプットに対する教科書のインプットの影響を調査した。その結果、教科書の談話標識は学年に応じた項目の選択がなされており、学習者のアウトプットにおいて教科書所収の談話標識の相対的な頻度は高くなる傾向が見られた。一方で、教科書より高頻度で用いられている項目も存在することから、教科書以外の要因が想定できる場合もあることがわかった。

研究1から4の成果に基づき、研究5では、日本人学習者にとってより適切な談話標識のインプットのあり方について大学生用教科書の観点から考察している。具体的には、ほぼ同一レベルの学習者を想定し、日本人向けに国内で作成された教科書5冊と国際的に用いられている海外で出版された大学生用会話教科書4冊、計9冊の会話文をデータベース化して、それらにおける談話標識の分布と英語母語話者、日本人学習者の使用分布を比較分析した。分析の結果、談話標識の分布に関して日本と海外の教科書間で有意な違いはなかったが、多くの教科書が学習者の談話標識使用の特徴を反映していることから、教科書で使用する談話標識の頻度や種類を決定する際に、学習者の熟達度が重要な要因となることが示唆された。

以上の研究成果に基づき、談話標識の機能によって学習者の熟達度に応じた指導が必要であること、日本人学習者の談話標識の混用や過剰使用などに対して特に配慮すべきであることなどの教育的示唆を行っている。

## 審査の要旨

### 1 批評

コーパス言語学と教材論の枠組みで行われた先行研究には、(1)英語母語話者の言語コーパスを分析し、その使用実態、特にある言語項目の出現頻度を、英語学習者に対するインプット項目の選択や教材開発において直接反映すべきであるとの考え方と、(2)英語学習者の言語使用(アウトプット)の集成である学習者コーパスの分析結果に基づいて、英語母語話者の基準とは別の基準によって学習者に適切なインプットの形式を探るべきであるとする2つのアプローチがある。しかしながら、従来の研究では英語母語話者と学習者のコーパスを別個に分析するケースが多く、その研究成果は言わば限定的であり、それぞれの提言には食い違いが生じることさえあるなど、両コーパスのデータを有効に活用して効果的な教材開発へつなげるための具体的、実証的な研究方法が確立されているとは言い難い。

本論文のトピックである「談話標識」は特定の語用論的、統語的機能を有し、円滑なコミュニケーションにおいて重要な役割を担う言語項目であると考えられており、英語母語話者の談話標識の使用と習得に関する研究は、コーパス言語学の発展に伴って盛んに行われている。一方、非英語母語話者の英語の談話標識の使用と習得についての研究は不十分であり、特に日本人英語学習者に関する同様の研究はまだ数が少ない。

本論文は、以上のような問題意識に基づき、日本人英語学習者の談話標識の使用と習得状況について緻密で

重層的な実証研究を行ない、さらにはその研究成果を基盤にして談話標識のインプットのあり方、すなわち教材開発の理論的枠組みについても提言を行っており、その研究成果は日本の英語教育に対して大きく貢献するものである。

特に本論文では、英語母語話者、日本人学習者、さらには日本人以外の英語学習者の言語コーパスと、中学校、高等学校、大学の英語教科書の教材コーパスの関係を適切に把握するためのモデルを設定し、それによってデータ間の比較・対照分析を駆使しており、当該分野に関してより妥当性の高い研究方法を開発したとも言える点は大変高く評価できる。

本研究の主な特長は以下の通りである。

- (1) 過去の学習者コーパス研究を精査し、Granger (1996), Gilquin (2001) などの統合的対照モデルと Tono (2002, 2004) の多重比較アプローチを援用して研究の理論的枠組みとなるモデルを構築し、その枠組みに従って5つの比較研究を行うなど、手堅い研究の手順を踏んでいる。
- (2) コーパスの比較・対照研究では、方法論的にどのようなコーパス・データを組み合わせたり、比較したりする必要があるかについて検討が重要であるが、本研究では現状で利用可能な NICT JLE, CHILDES, BNC, LINDSEI などのコーパスを最大限収集し、それらから適切にデータをサンプリングして比較に有効なサブコーパスの選定を行っている。
- (3) 後半の研究では中学校、高校、大学の英語教科書のデータから教材コーパスを独自に作成するなど、適切なデータ収集が図られており、他のコーパス・データと合わせて膨大な資料を綿密に分析している。
- (4) 日本人英語学習者の談話標識の使用と習得の諸特徴やその要因の一端が一層明確にされただけでなく、部分的ではあるが、日本人英語学習者の談話標識の習得における母語の転移と教科書によるインプットの影響の可能性が実証的に示されている。
- (5) 教科書等の教材開発に対して実証研究に基づく提言が行われており、例えば、熟達度の低い学習者には、*and, because, then* などの指示的、構造的機能を有する談話標識を優先的に指導し、*well, really, you know* などの対人関係的、認知的機能を有する談話標識は熟達度の高い学習者を対象にすべきであるなどの指摘は、教材論の観点からも評価できる。
- (6) 量的な研究の部分については多様な統計処理が行われているが、総じて適切であり、図表などの量や提示の仕方も理解しやすいように配慮されている。加えて英語も明解である。

以上、全体としてよくまとまった優れた研究であると言えるが、一方で以下のような課題も指摘できる。

- (1) 今回分析の対象となった談話標識は、Fun and Carter (2007)で取り上げられた57項目であり、それ以外の項目は分析の対象とならなかったが、その中に日本人学習者にとって重要な項目が含まれていないかどうか、より詳細な検討が必要である。もっと言えば、Fun and Carter の談話標識のデータ自体や機能の分類方法などの妥当性についても再検証する価値はあると思われる。
- (2) 上とも関係するが、Fun and Carter の談話標識は対話(dialogue)によるデータを基にしており、独白(monologue)の場合は考慮されていない。しかしながら、本研究ではごく一部であるものの分析データに独白が含まれるものがある。厳密性の観点から惜しまれるところであり、再検討が望まれる。
- (3) 本研究は、基本的に言語コーパスの量的分析に基づく研究であると言える。学習者に適切なインプットのあり方について考察する際には、言語項目の頻度情報以外にもコーパス分析から得られる情報はないかどうかについて、さらなる検討が期待される。

## 2 最終試験

平成26年6月6日、人文社会科学研究所科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で

合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。